彼らの意見から主なものを拾ってみました。
１　来鯖メンバー
長澤亮　　　創造理工学部　 男　3年（３回目の来鯖）
芳賀昇平　　創造理工学部　 男 3年（３回目の来鯖）
廣川諒祐　　創造理工学部　 男　2年（３回目の来鯖）
菅野智代　　日本女子大学理学部 女　2年（初参加）
藤原蓮美 国際教養学部 女 1年（初参加）
大園千尋　　先進理工学部　女　1年（初参加）
笹川晃　　　政治経済学部　男　2年（初参加）
米谷宏美　　人間科学部　　女　1年（初参加）

２　滞在期間・滞在場所
　８月9日～１２日　河和田町古民家

３　主な意見
◆　地域の絆
・　漆器には色々な工程があり、木地づくり→塗り→加飾（蒔絵、沈金）など職人が関わりあうことで成り立っている。地域の絆の深さはこんなところから来ているのではないか。
・　東京では2時間くらいは通勤圏、職場まで２時間もかけると、家には寝にかえるだけになる、コミュニティ活動への参加もなければ地域でのつながりも出来ない。しかし、ここでは、住むところと働くところが近い。（都会では定年退職してから、地域活動に参加する人もいるが、大切なとき、大切な時間が過ぎてしまっていると思う。価値観というものを考えさせられる。）
・　河和田にはコミュニティが存在する。地域社会の繋がりが暖かさを生んでいると思う。（東京にはないこと）
・　鯖江（河和田）の良い点は、地域に住む人が、外部の人間に対してウエルカムであること。他の地域が学生を迎える姿勢と比べてホスピタリティにあふれている。
・　河和田の人口減少を問題視していたが、全国的な過疎地域に比べればまだまだ大丈夫である。しかし、将来を予測し、対策を打とうとしているところは評価できる。過疎化が深刻になる前にそれを食い止めた地域として、モデルになるような道のりを歩んで欲しい。
・　「大学のない鯖江に大学生が」というキャッチフレーズが印象的だった。田舎の模範になるような取り組みなので、もっとＰＲすればいい。
・　鯖江は日本の伝統的な魅力を多く残している。田園風景、共同体社会等。
・　懇談しているとき感じたが、河和田には学生に対して、こうしたらよい、このように考えて欲しいとアドバイスできる人が多くいる、これは、学生にとっては一つの魅力で、他の地域ではあまりないことである。（今の若者の気質の表れかもしれない　ほったらかし、自主的な活動というのは、ある意味退屈なのでしょう。）

◆　提案事項
・　都心の過剰高齢労働者を期間限定で受け入れられないか。伝統工芸を残したいと願う高齢者も多いので、そこがうまくいけばＰＲポイントになる。東京で定年退職した人の受け皿（賃金労働ではなくボランティアも可能か？　または、遊休農地の開墾や、古民家再生→居住も可能か？）
・　学生達を受け入れるのと同じように、東京の定年退職者を受け入れられたら・・・（難しいことではない）
・まちが縮小する課程にも悪い縮小の仕方と、良い縮小の仕方がある。河和田は、仕事さえあれば、物価は安く、土地も広く、高い文化があり若い世代にも魅力がある。都会に出たからといって、仕事につけるという時代ではなくなった。就労という視点で都会のアドバンテージが小さくなっている。河和田には新しいアイデア、工夫が非常に出やすい環境がある。人が集まり話し合いをする、多くの学生を集めていることのその一つである。
・　漆も今は殆ど中国産、ベトナム産と聞く。日本古来の漆（生漆）で漆器を作って欲しい、生漆の良さを前面に出し、高くても売れる賞品を作ってはどうか。（これには行政の支援が必要かもしれない）
・　学生が沢山入り込んでいる地域だが、違う主体同士が集まり話し合う機会が少ないのではと思う。まったく違った大学、学部が集まり地域の人とアイディアを出し合えば、もっとおもしろいことが出来る。
・　鯖江には海があると思ってしまう。鯖というものを一つのモチーフにしては。鯖を養殖することがコスト的に合うならそれもいいが、小さなこと、焼き鯖でも鯛焼きの代わりに鯖焼きという風に、何でもかこつけてみては。
・　地場産業や農業を個人個人の利益という考え方ではなく、共同体の中でと考えられないか。全体で利益を上げ、個人個人に配分することが出来れば、持続の可能性が出てくる。（グループでアイディアを出し、グループで利益を出し、グループで土地の利用や、空き家の利用を考えるなど）